令和４年６月２０日（月）北日本新聞

看護服 勤務時間で色分け

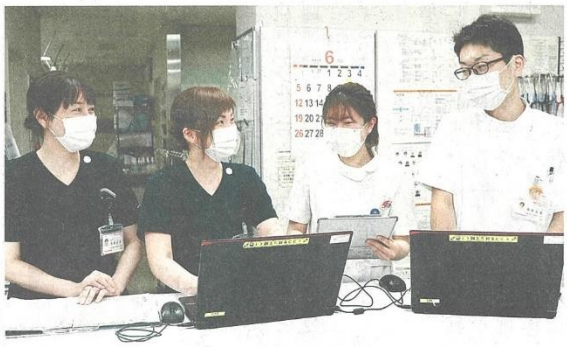
時間外労働減少へ

県内病院

病棟看護師の時間外労働を減らすため、県内の病院が紺やオレンジ色の夜勤用ユニホームを相次いで導入している。日勤者は白色のままで、看護師の勤務時間を知らない医師や患者が一目で違いを分かるようになり、規定の退勤時間を過ぎた後に新しい仕事が任されることを防ぐ。看護師の人数が多い大規模病院で、帰りやすい環境をつくる一手となりそうだ。

（飯田章太郎）

日勤⇒白色　夜勤⇒紺・オレンジ色



日勤用の白と、夜勤用の紺のユニホーム姿で打ち合わせする看護師＝県立中央病院

看護師は患者の看護だけでなく、事務作業など多くの業務を抱えており、労働時間が長くなりやすい。休日を確保するため2交代制に移行する病院では、1日の勤務時間が10時間以上に延びるケースもある。

日本医療労働組合連合会が昨年、全国の看護師7千人を対象に行ったアンケートによると、「心身ともに疲れ果てている」と答えた人は20・6％で前年度比2・2ポイント増えた。

コロナ禍で看護師不足が深刻化する中、各病院は看護師の業務を補助する「看護助手」や、事務負担を軽減する「病棟クラーク」を配置するなどして働き方改革を進めており、ユニホームの2色制もその一環。看護師が規定の勤務時間を過ぎてから、新しい仕事を頼まれて残業してしまうのを防ぐため、ユニホームの色で勤務時間が過ぎているかどうかを視覚的に示す。

県立中央病院は今月から、夜勤用の紺色ユニホームを導入した。同病院では入院日数の減少で入退院の手続きが増え、看護師の負担が重くなっている。この2週間で、医師や患者から退勤時間を過ぎた看護師に、仕事を頼まないようにする配慮が定着してきている。殿谷智子師長は「日勤から夜勤への引き継ぎが早くなり、深夜の時間外勤務はほぼなくなった」と歓迎する。

5月に導入した金沢医科大学氷見市民病院（氷見市鞍川）も日勤は白、夜勤は紺としている。高木雅美看護部長は「患者や医師も看護師の退勤時間に配慮するようになり、帰りやすい環境が生まれることに期待したい」と話す。

患者にとって、想定外の効果も出てきた。富山赤十字病院（富山市牛島本町）は昨年に2色制を採用し、夜勤服はオレンジ色。同病院の森太貴子看護部長は「夜勤服が目立つ色なので、一日のほとんどをベッドの上で過ごす患者にとって、昼夜の区別がつきやすい効果もあるようだ」と語った。